
グレンゼの境界

臨音深霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレンゼの境界

【Nコード】

N0075Y

【作者名】

臨音深霧

【あらすじ】

大都市、レゲニアツイオンに5年振りに帰ってきたヒロイン、エルナ。
ルナ。

そこから始まる物語に、ファンタジーエルナは何を思うのか。

焼け野原。どこを見渡しても焼け野原。そんな中、少女は一人、ふらふらと歩いていた。

この焼け野原の中、不思議な事に彼女は無傷であった。しかし、細い手足には力が残っていないらしくやがて、地面に崩れるように倒れ込んだ。

（いけない：私がここで死んではいけない：）

彼女は自分に言い聞かせるように頭の中で繰り返しながら残った力で起き上がりひざまずく跪く。

瞳を閉じ、顔を上に向け、誰もいない蒼空に叫んだ。

「主よ！私はこの悲惨な戦いに終止符を打ちました！」

「：：そうですか」

どこからともなく声がした。それはテノールがかった美声で、例えるならば神のようであった。

「ならば、貴女には名前をあげよう」

そう、少女には名前がなかった。

「貴女の名は『グレンゼ』」

「『グレンゼ』：」

「意は：『境界線』。」

「ありがとうございます！」

少女：グレンゼは瞳を開く。

「主、私が主のお目にかかるのことは許されないのでしょうか！」

「そうですね、今の貴女なら：」

グレンゼは虚空へと消える。

「境ちゃーん！」

甲高い声が背後から聞こえた。

「憂！ 久しぶり！」

5年振りに会った友人は少し大人びていた。

「相変わらず綺麗な顔してるねー！」

「憂は相変わらず可愛いね。」

二人はそんな会話をしながら都市の中心部にあるスレシティアンテ大聖堂に向かった。

都市レゲニアツイオン。レゲニアツイオンは一度、壊滅かいめつした。まあかなり前の話なのだが。この戦いをレゲニの惨劇と言う。

それからはスレシティアンテ大聖堂に入り口がある『ウラトシ』で『都市再生計画』が行われていた。

しかし、都市再生計画が終盤を迎えるとウラトシはZenRegゼンレグという反政府組織により侵略されてしまう。

先程境ちゃんと呼ばれていた少女、宇境エルナや憂うきようと呼ばれていた五月雨憂さみだれゆうもZenRegゼンレグの一員なのだ。

「5年間ブハイヒに行ってたんでしょ？ どうしてあんな田舎に行ったの？」

「私の生まれがブハイヒなのよ。」

「へえー！ そうだったの！ ここ5年で汽車の編成が色々変わったからレゲニに来るまで3日くらいかったんじゃない？」

「いいえ、半日で済んだわ。届け屋の知り合いがポスタルスタツズまで届け物するから一緒に行かないかって。そこからなら終着駅がレゲニの汽車がでてるからついでに戻ろうかと思って。」

「じゃあまたレゲニに住むの？」

「そういう事ね。ついでにZenRegゼンレグにも復帰することになったわ。」

「ほんと！ やったー！ また境ちゃんとキャツキャウフフ」しなくていいわ」

辺りを見回してみる。5年前と差ほど変わらぬ街並み。都会の冷たさがありつつも賑わう人々に親近感を感じる。

なんて素晴らしいのだろう！レゲニは少しずつ、緩やかにその名の通り『再生』しつつあった。

「そろそろかもしれないねえ…時。時が満ちるかもねえ…近いうちに。」

男は口元だけで微笑^{びしょう}する。

「相変わらず気持ち悪いわダルカル何とかできないのその口調吐きそうだからDU内でもモテないのよプギヤーム9いっぺん死んどけ変態」

「そういう君もすごい喋り方するよねえ…ネイザ。君はロボットなのかねえ…ネイザ。ま、そんな君の全てを愛しているんだけどねえ…好きだ。」

「気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い死んどけ」

「ネイザはツン期なんだねえ…可愛い。」

「ダルカル、そろそろやめとけ。」

二人が驚いて振り向くと長身の男が立っていた。

「和久貴方いつどこからどうやって入ってきたの気づかなかったわ」

「ダルカルが時が満ちるとか言ってたときにそこの扉から普通に入ってきただけだが。」

「流石、忍者大国出身だけのことはあるねえ…感心。」

「そりやどうも。」

「で、君が居るって事は麻依ちゃんも居るんだよねえ…絶対。」

「あーったりまえなのよー！」

ていつ！というロリ声と共にちっちゃい女の子が飛び降りてきた。

「麻依はいつ何時^{なんどき}も兄者の傍にいます！」

和久の腰に後ろから抱きつく。

「イラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつく」

ネイザは麻依に鋭い目を向けた。

「ネイザ姫こわーい」

「何でなのかねえ…不満」

今度はダルカルが和久に鋭い目を向けた。

「何で君みたいな影薄男かげうすおとこがモテてこの僕がモテないんだろうねえ…不公平。」

「まあ皆落ちつけて。」

和久がその場をなだめる。

「ところで、ダルカルの言ってた『時が満ちる』って何のことだ？」

「おーっと、……………忘れるところだった。」

ダルカル…ダルカルⅡニースはいきなり人が変わったように喋りだした。

「ネイザミアⅡフレイ、河内和久かわちわく、河内麻依かわちまい。時は満ちようとしている…」

「その喋りは…『主』あるじか？」

「左様。君たちを呼び出したのも私だ。」

「で？満ちるとは？」

「グレンゼ…グレンゼが復活しつつある。」

「グレンゼ…ですって!？」

3人は息をのんだ。

「グレンゼが…」

「そうなのです。地上に墮りおようとしているのです。」

一方のエルナに身を借りた『主』あるじもグレンゼの復活を告げていた。

この世界には稀に神…と言うよりは神に近い存在、『主』あるじを自分の身に取り込み声を聞いたり力を借りたりできる者がいる。

そんな者達を人々は『エンゲル』と呼んでいた。ダルカルもエルナもエンゲルである。

主の姿は取り込んだ者さえも見る事ができず、主あるじに認められた者しか見ることはできない。

主あるじに認められた者は主と同等の『神に近い存在』になれるらしいのだが、そんな者は未だに一人：グレンゼくらいしかない。

「グレンゼは今も彼女の境界の中で静かに復活の時を待ち続けます。彼女が人間の中に取り込まれればその人間はキャパシティオーバーで逆に彼女に取り込まれ、彼女は段々と力を増していくでしょう…」

「グレンゼの力ってそんなに強大なの？」

「はい：なんせ主を取り込んだうえに自分も主あるじになれる程の力を持つているんですから…」

「つまり、主あるじの力2倍って事ねー」

「いいえ、確証はありませんが彼女はもしかしたらもう一人、主あるじを取り込んでいる可能性があります。」

「げっ：つまり3倍…」

「ええ。それくらいの力が無くては境界など造れませんから。」

グレンゼは異次元に『境界』という自分の世界を持っていた。彼女はレゲニの惨劇が終戦した直後、境界を造り、そこに住んだ。

異次元の境界であるため、歳はとらないらしい。

「：グレンゼの力を欲している者が話を盗み聞きしているかもしれません。話の続きはスレシティアンテ大聖堂に戻ってからの方がいいでしょう。」

主からエルナに戻ると二人は急ぎ足で大聖堂へ向かった。大聖堂の前まで来ると、小さな女の子がエルナを見つけ、顔を明るくさせた。

「エル姉！」

「あ、ムーちゃん！」

ムーちゃんと呼ばれた少女はとてとて走ってくるとエルナの前に姿勢正しく立った。

「ムーちゃんおっきくなったねー！今年で何歳になったんだっけー？」

「9歳になった!」

ムーロフィオネは^{ゼンレグ}ZenRegの最年少メンバーで、エンゲルやグレンゼの研究チームに4歳から所属している。

「あ、そういえば憂姉、セグ兄に呼ばれてたよー!」

「はい、じゃあ早速ウラトシに入らなきゃ。」

大聖堂の重い扉を開けると、二人のシスターが出迎えてくれた。

「ウラIDとウラPASSのご呈示をお願いします。」

「ID、ANURE。PASS、The Blue God world
I l t e n G e r e c h t i g k e i t 【青き神に正義を求む】。」

「ID、RAIN-5。PASS、Alles, was regu
n u n d n a s s e n 【全てを濡らす雨となる】。」

「ID、MUF。PASS、Ich bin für die
W e l t 【私は世界の為に】。」

「確認がとれました、ウラトシへ行ってらっしゃいませ。」

シスター達が口をそろえて言うのと目の前に光の扉が現れ、開いた。

「5年振りかー」

エルナは扉に足を踏み入れた。

「^{あるじ}主…」

少女は隣に座る主の腰に手を回す。

「主…^{あるじ}レゲニは再生しつつあります…少しずつ、緩やかに…。」

「そうですね」

主は^{あるじ}少女の頭をなでる。

「私…レゲニを惨劇が起きる前のレゲニに戻したいの…だから…地上に墮りて革命を起こすわ。」

「君の好きにすればいい…グレンゼ。」

グレンゼは薄く笑う。

ウラトシは5年前と変わらず、ZenReg^{ゼンレグ}の者達が慌ただしそうに働いていた。

「おー、あれ、エルナじゃね？」

「エルちゃんだね。」

「境ちゃんだあー！」

「おっ！杯ブラザーズじゃないの！」

背の高い方から杯黒徒^{さかずきこくと}、杯灰徒^{さかずきはいと}、杯白徒^{さかずきはくと}。三つ子である。

「皆元氣そうでよかったー！黒徒の中の主さん^{あるじ}はどうー？」

「ああ…」

「…グレンゼの事聞いたのね。」

「お前も聞いたのか…。」

一瞬にして空気が重くなる。

「憂姉！そろそろ行かないと、セグ兄待ちくたびれちゃうよ！」

ムーは空気を変えるため話を切り替えた。

「あ、そうだった！ムーちゃん、セグのところに案内してくれる？」

「はい！」

「…場所を移そうか、ここじゃ何だしね。」

四人はエルナの荷物をフロントで受け取ってから今日からエルナの住む部屋へ向かった。

「おう…5年振り…」

私がない間誰も使っていなかったらしい。置いていったベッドや机、本棚の位置は変わっておらず、懐かしく感じた。

「誰も使わなかったのね。」

「エルナが戻ってくるかもしれないからって管理チームが誰も住ま
せなかったんだ。」

「そう…」

「それに、境ちゃんの世界に何十人しかいないエンゲルだしねー」
「あ…」

エンゲルと言うだけで別格視される。エルナはそれが嫌だった。

（私は只、主の声が聞けるだけで他の子と何一つ変わらないのに…）
神は不公平だ。

「神は何故、主を作り出したのだろうね。主は何故、人間の味方をするのだろうね。人間は何故、主を取り込んだ者をエンゲルと呼び崇めるのだろうね。私は何故…エンゲルに選ばれたのだろうね。」
エルナの本音だった。

「灰徒、白徒。部屋に戻っててくれないか。」

「黒徒兄さん…」

「いいから。」

二人は渋々部屋を出て行った。

「…ありがとう…黒徒」

灰徒と白徒は気づかなかったようだが黒徒は気づいていた。エルナが泣いているのを。黒徒達を心配させないように、静かに泣いているのを。

「俺だっと思うさ。なんで俺がエンゲルなのかって。でもしようがないじゃないか。神が主を作り出し、主が人間の味方をし、人々がエンゲルと呼んだのだから…！」

「…だから、誰かがやらなきゃいけないんだよね…」

「……………」

それ以上言葉を見つけられなかった。

「こんな事してる場合じゃないや…まずはグレンゼを…グレンゼを…」

エルナは言葉を詰まらせた。

「グレンゼを…どうすればいいの？」

「どうすればって…倒せば…!!!」

黒徒も気付いたようで言葉を詰まらせた。

エンゲル達は、グレンゼが復活すると聞いただけで、『何のために』

グレンゼが復活するのは知らなかったのだ。

「グレンゼはレゲニの惨劇を終わらせた英雄でしょう？じゃあ、レゲニやこの世界に害を与えることなんてする理由が無いじゃない！」
正論だった。

「…主に詳しく聞いた方がよさそうだな…」

「その心配はないよー！」

ガチャッと扉を開ける音が聞こえたかと思うとそこにはムーと憂とセグロイがいた。

「やあ、エルナちゃん、久しぶり。」

「セグロイ！久しぶり！」

「ははっエルナちゃんは相変わらず僕のことをフルネームで呼ぶんだね。」

軽く挨拶を交わすと憂が話を切りだした。

「戦闘チームのあなた達にお仕事よ。」

ZenRegは研究チーム、整備チーム、戦闘チーム、護衛チーム、管理チーム、医療チームの6つに分かれてそれぞれの仕事をこなしている。

「研究チームの観察班から報告があったの。レゲニの外れにあるベックア ril でブラックホールみたいなものを見つけたって。」

「ブラックホール？」

「みたいなものよ。調査によると中は別の世界へつながってるみたい。」

「入ったら帰って来れなくなるとかは？」

「それもないみたい。」

「ただの出入り口ってとこか。」

「そういうことね。」

「それでねーエル姉達にはそのブラックホールみたいな出入り口の先はどうなってるかを調べてもらいたいのー！」

「出現したのが丁度世界中のエンゲル達にグレンゼの復活を告げられたときと同じなの。だから、グレンゼの件と何かリンクしている

のかもしれないわ。」

「そう…で、誰が行くの？」

「エルナちゃん、黒徒くん、灰徒くん、白徒くんの4人で行ってもらう。」

「わ…私たち!？」

「な…なんで俺らが…」

「管理チームが決めたことだからしょうがないよ。それに境ちゃん達なら大丈夫だって！」

「えー…」

「決行は明日の午後2時。それまではゆっくり休んでちょうだい。境ちゃんだって帰ってきたばかりで疲れてるでしょう？」

「うん…ありがとう。」

「ほらほら、みんな部屋から出よう！じゃあまた明日ね！」

「うん、また明日。」

憂はほらほらとみんなを促して部屋から追い出すと最後にエルナに手を振って部屋を出ていった。

（久しぶりの任務ね…）

時刻はもう8時を越えていた。

皆さんはじめまして。臨音^{りんねみむ}深霧と申します。

こちらに小説を投稿させてもらうのは初めてになります（ドキドキ

キーワードに「恋愛」とか「戦闘」と書いておきながら
まだ全然出てきてませんごめんなさい；；

この「グレンゼの境界」は臨音に珍しく世界観が外国だったり
google先生を頼りにしながら少しドイツ語を組み込んでみた
り。

色々不備があったりするかもしれませんがこれから宜しく願いたい
します！

【ドイツ語・日本語】

グレンゼ…境界線

スレシティアンテ…裏都市

レゲニアツイオン…再生

エンゲル…天の使い

ブハイヒ…野原

ポスタルスタツズ…郵便街

ベックアリアル…路地裏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0075y/>

グレンゼの境界

2011年10月29日01時16分発行